人間らしく生き そして働くために

四山鉱の重大災害に思うこと

四山指導部　宮崎　勝

はじめに

昭和四十五年七月六日、北海道夕張新炭鉱においてガス突出による爆発が起こり、死者五名に重軽傷者十四名という重大災害を引き起こしたが、以来三井砂川のガス爆発、三菱高島のガス爆発、そしてさきの十一月二十七日幌内炭鉱におけるガス爆発と坑内火災により、二十四名の死者が出、七名の重軽傷者が出るという重大災害にいたっています。

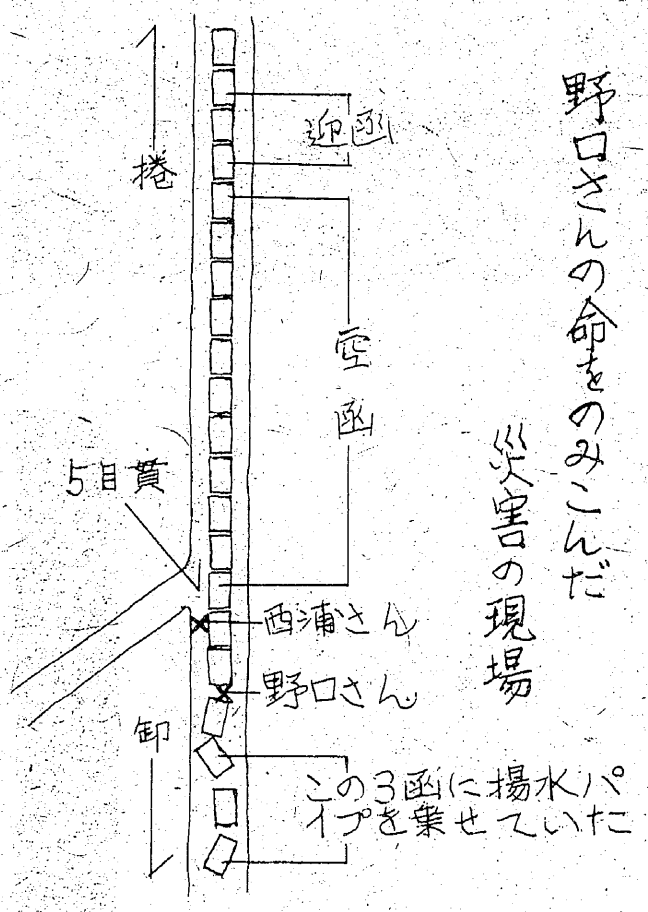
このように激発する炭鉱災害のなかで、三池においても同じく重大災害が激発しています。

昭和四十五年十二月八日の十一時四十分ごろ、四山鉱上層三十五卸において、本修部内の野口政則さん（新労組員で三十五歳）は、車道整備中に降下してきた炭函と台車（二十一両編成）の下敷きとなり、妻や小さい子供を残したまま、入社三ケ月にして尊い生命を奪われ、また新労組員の西浦弘盛さんも、一歩まちがえば野口さん同様死亡災害に追い込まれるという重傷を負われました。

この災害はいままでの災害でも明らかにされているように、人命無視、生産第一主義が原因ですが三井鉱山は災害の原因をおおいかくすために、必ず「労働者の不注意論」を強調してくるに違いありません。

このたびの災害についても、その原因は会社の生産第一というのが明らかであるにもかかわらず、作業する人がもう少し注意していたら災害はまぬがれた、といってくる。つまり、災害の原因を労働者に求めることによって、企業内の恥部（殺人合理化）をおおいかくしていこうとしているのです。

二十両編成の炭函が走ってきて西浦さんと野口さんをまきこみ、とくに野口さんの体が歯止めとなって四両（鉄パイプをのせていた）が脱線。そしてその四両は野口さんの体を乗り越えて突きすすみ、図のようにとまったのでした。



原因追及と「生命を返せ」の抗議行動を展開

私たちは、このたびの災害の原因について指摘しています。

一、車道内での作業にもかかわず、見張人（警戒人）も出していない。

二、規定函数（会社が定めた炭函の数）二十函のために、無線車（運搬の人が乗る手前の炭函）から二十函先までは約六十メートルもあり、視界がきかない。

三、本修、運搬、機械という係員三者の連絡がとれてない。

四、規定函数が一函オーバーしている。

その他多くの問題がありますが災害の主たる原因は、人命無視の生産第一主義からくるものであり絶対に許すことのできないことを確認しました。

私たちはこのように災害の原因を明らかにし、たとえ組織こそちがっているといえども、三労組仲間の皆さんとも同じ労働者階級であることから、鉱長室に対する抗議行動を展開し、「労働者の生命を返せ」、「二度と災害を起こすな」という抗議と要求をおこなってきました。

鉱長は、「今後起きないように努力します」といいますが、本当にそうだろうか。二度と災害を起こさないということを資本に実行させるためには、なんといっても職場生産点における反合理化のたたかいと、そのたたかいのなかで反独占という階級的思想を高めていかねばならない、と思います。

正確な実態把握で反撃の体制づくりを

三井独占は利潤追求のためには労働者をどれほど殺害しても傷つけても、平気でいるのです。労働者はそのことを知っています。したがって三井独占は、その矛盾をおおいかくすために、「労資正常化」の名によって「労資協議制」や、それに類する労資間のルールを確立することを急ぎ、職場の要求で、実現できるものについては前向きに検評するポーズをとり、そのかわり組合側も、日常的なトラブルはおこさないように、といってくるのです。

このような攻撃が、新労組をテコにしながら私たちの職場にかけられてきてはいないだろうか。したがって、「少々危なくても仕事しよう」「少々きつくても仕事しよう」、ということにはなっていないだろうか。または、私たち自身の側で、たたかいが組織的にとりくまれているかどうか。私たちはこのような職場の実態を正しくとらえかえして、反撃の組織体制こそつくりあげていかねばなりません。このたたかいの強弱こそが独占資本を圧倒するかどうかのカギになることと思います。

つまり、労働者の生命と権利を守り、人間らしく生きることを勝ちとることだと思います。

労働者こそ職場の主人であることを確認しよう

私たちがいままで実践してきたことでありますが、職場でのたたかいは、まず労働者が生産の担い手であり、主人であることを資本に思い知らせ、労働者の団結をかためていくことだと思います。

マルクスは書いています、「一年といわず、二～三週間でさえ労働を止めたら、どんな国民でも死んでしまうということは、子供でもみんな知っている」と。

この子供でさえ知っていることが、資本主義のもとでは、また正常化のなかではとかく忘れられ、働くことが資本の搾取の手段となり、しかもいのちまで奪われていくのが現実の姿となっているのではないでしょうか。そのことが、もっとも具体的に示されているのが職場の生産点です。三井のいいなりになったら、労働者は無権利状態につき落とされ、酷使され、つかい捨てられるだけです。したがって、職場抵抗のたたかいが不可欠なこととなります。

統一闘争の強化で生命と権利を守る闘いの前進を

私たちのたたかいは職場におけるたたかいが基本ですが、ただ職場のたたかいが強化されれば生命と権利が守れる、ということには必ずしもならないと思います。

つまり私たちの職場だけでは、生命を奪う合理化に対し、一定の歯止めはできても、全労働者の生命を守ることにはならないと思います。要はこのたびの運搬災害が示したとおり、資本の側は、必ず弱い部分に攻撃をかけると同時に労働者の分断をはかってくるのが常です。

したがって私たちはそのような分断攻撃をはねのけ、これまで組織のたたかう統一をかちとらねばならないことを、意志統一してきました。

私たちは、三井の人殺し合理化を許さないためにも怒りを新たにして、階級的なたたかいをより強化することを決意するものであります。

「抵抗なくして安全なし。安全なくして労働なし」を合言葉に、人間らしく生きつづけ、働きつづけるために。

拝啓係長殿

拝啓係長殿。保安交渉の報告を聞きました。

二、三改善されるということですが、ストーブ用燃料など早く運搬せよが、係長の返答は「努力します」のきまり文句。半月もなろうというのに、燃料のかけらも見ません。

早目にストーブを入れるよう、お願いします。

三川鉱優良社員

許せぬ社宅合理化

むしろ経営の近代化を

本所指導部

いま社宅経営のなかにでてきている会社の合理化が広く論議を呼び起こし、しだいに気運を強めている。

本所指導部も別ではなく、とくに会社が合理化の対象の一つにしている宮原社宅をもつだけに、問題は深刻だ。

二日同指導部は、指導部委員・地域分会長会議を開いてこの問題について討議した。

結論はもちろん「反対」。「まるで真綿で首をしめるような、悪質な合理化をつきつけてくる以上立ち退くことはできん。これを許せば、攻撃の矢はほかにも広がる」ということ。

それよりもむしろ、①社宅に長く住んできた以上、あくまで居住権を主張し、当然だが近代化資金を使わせて行く。②空屋対策、子弟の非行化防止、火災防止、雑草対策をとらせるため積極的に要求をつきつけて行くべきだ、と主張する。なお宮原社宅は宅地造成をはかり、会社は高く売り渡すハラだというが、もしその計画があれば、退職者もでる組合員に差別なく安く払い下げることの方が先決だろう。現に三井東圧化学などにその例もある。

本所指導部はこうして、社宅合理化に反対して闘って行く。

余りにひどい差別

▼…うん、おりでんそげん思いよったん。ありゃ、あんまり。こげん寒うなってから、あげんとこで着がえさするちいうこつがあるかん。いくら組夫ちいうても。

わずか二～三人。ロッカーのあいとるとじゃけん、一人ずつ支給されるもんじゃろか。

もしもあんたが差別されて見んかん、どげん気持になるか……。

（三川鉱第二脱衣場から、浴場へ向かう中央通路で着がえをしている組夫の人たちだった）

職場から告発し 反独占の闘いへ

大阪　安井栄一

去る十一月十七日夜労金会館において〝三池CO闘争大阪集会〟が開かれた。

うたごえのあと、片岡さんからこの集会の意義と経過が報告された。その中でとくに、京都全通（中央郵局）の仲間は、自分もふくめ数名が頸肩腕障害にかかり、現在も手がしびれ、「このようにふるえがとまらない」と、右の手をかざしてうったえられた。

人員がへらされ、生産はふえる中で労働強化になり、仲間の一人は頸肩腕障害で倒れ、いまも休んでいられるとの報告だった。

自分の体の不自由さのどうしようもなさからくるその鋭い、郵政合理化への怒りが、われわれを共に動かすものがあった。

そのあと、中村重和労大講師から「資本主義的合理化と労災・職業病」の演題で講演があった。

講師はまず六十年代に、労災保険法の適用を受けた人が千三百二十万人、死亡者総数の四～四割五分が建設関係の労働者である、と

の指摘から、これはちゃんと手続きをすませた数であり、実数は十倍以上の死傷者がかくされているそうだ。六十年代の高度経済成長は、まさに労働者の犠牲の上におしすすめられたことが確認された。

労災は、結果である。

原因は個人の不注意でなく、制度からくる資本主義的合理化である。われわれが職場で、労災・職業病闘争をどう闘うかという視点は、まさにここにあり、たとえ人間が不注意しても労災が起こらないような職場、環境、生活を使用者の責任で整わせる――という方向で追及しなければならない。

一九六〇年の三池と安保の大闘争。勤労者大衆の利益を代表して三池労働者は、「安全なくして労働なし。闘いなくして安全なし」のスローガンのもとで闘った。

結果的に総資本の力の前に敗北したが、そのあとに襲った、徹底した合理化攻撃の結果起こった、三十八年の大災害を忘れてはならない。その被害者と連帯し、資本に立ち向かっていくことが、自分自身の立場をも再確認させてくれるものと思う。

CO闘争は、資本主義が続く限り存在し、反戦平和、護憲、原水禁運動とともに、大きく総資本に立ち向かう反独占統一戦線の一角として位置づけなければならぬ。

×

このほど寄せられてきました、まなぶ友の会大阪府連絡協議会（大阪市北区与力町二―二九労働大学気付）の機関紙〝まなぶ〟（十二月八日発行）に掲載されていたものです。

なお同機関紙には、「CO患者守る会へ入会しましょう」とのアピールも掲載され、注目をひきました。